

産業構造審議会 産業技術環境分科会 研究開発・評価小委員会
第５回評価ワーキンググループ
議事録

【日 時】

平成２６年１月２４日（金曜日）１３：００～１６：００

【場 所】

経済産業省別館６階６２６・６２８会議室

【出席者】

渡部座長、菊池委員、小林委員、鈴木委員、津川委員、森委員

（経済産業省出席者）

安永大臣官房審議官（産業技術・基準認証担当）

吉野産業技術政策課長

徳増国際室長（研究開発課兼任）

事務局：飯村技術評価室長、内田補佐 他

【議事次第】

- １．平成２５年度中間・終了時技術評価実施計画について （報告）
- ２．技術に関する事業の評価について （審議）
 - （１）ナノ材料の安全・安心確保のための国際先導的安全性評価技術の開発
 - （２）石油精製物質等の新たな化学物質規制に必要な国際先導的有害性試験法の開発
- ３．経済産業省技術評価指針の改定について
- ４．その他

【議事内容】

○渡部座長

それでは、審議を再開させていただきます。事務局から経済産業省技術評価指針の改定の方向性についてということで、ご説明をお願いいたします。

○飯村技術評価室長

改めまして、技術評価室長の飯村でございます。資料は関係のもので4点ございますが、パワーポに出ている資料8、カラーの横のやつをごらんいただければと思います。

経済産業省の技術評価指針の改定ですけれども、平成24年12月に総合科学技術会議のほうで国の研究開発評価に関する大綱的指針。原文は補足資料—4でございますけれども、こちらのほうが改定になりましたので、各省はそれを受けて自省の評価指針を改定するという運びになっております。この評価ワーキングの前身であります評価小委員会におきましても、昨年3月に一度ご説明、審議いただいておりますので当時の委員の方は覚えていらっしゃるかと思います。まず簡単に国の大綱的指針改定の概要をご説明しまして、その上で経産省の対応ということを順を追ってご説明したいと思います。

まず、パワーポの資料の1ページ目でございますけれども、国の大綱的指針、平成24年12月の決定は改定のポイントとして大きく2つございます。①の研究開発政策体系におけるプログラム評価の導入、それから②のアウトカム指標等による目標の設定の促進。これが今回の大綱的指針改定の大きなポイントでございます。

プログラム評価は従来、今回もみていただいたような研究開発課題。よくプロジェクトと呼ばれますけれども、その有機的な関連づけによってプログラムという単位で評価をする。あるいは競争的資金制度。これは従来制度という形で評価していたのですけれども、それを研究資金制度という単位でプログラムとして評価の対象とする。これがまず1点目でございます。

それに従いまして評価の対象の階層なのですけれども、従前施策、その下に研究開発課題、プロジェクト、制度というようになっていたのですけれども、施策の下にプログラムと制度、その下にプロジェクトという階層になっています。

めくっていただいて3ページ目の絵を見ていただくと、左側が現行、施策の下にプロジェクトがぶら下がっている。あるいは研究開発制度があって、その下にさらに研究課題。テーマといたり、個別の競争的資金で選択される小規模なプロジェクトというような形で階層化されていたのが現行の形です。

これを改正案、右のほうでは施策、それから研究開発プログラム、事業——通常プロジェクトと呼ばれているもの。その3層に整理しまして、特に施策より下のプログラム等プロジェクトのレベルで評価をする。特にプログラムについては2類型ありまして、複数の研究開発課題によって構成されるプログラム。いわゆるプロジェクトが下にぶら下がった

ような形のプログラムと、それから右の資金制度によって小さな研究課題が下にぶら下がっているという形のプログラム。2類型にプログラムを分けて、プログラム、またはその下のプロジェクト、あるいはプログラムにぶら下がらない個別のプロジェクト。一番右の施策の真っすぐ下にありますけれども、そういう形の類型で評価をしていく。そのような状況になっております。

また1ページ目に戻りまして大綱的指針の改定では、構造の変化とともに評価部門の運営の独立への配慮ですとか、プログラムディレクターの専任化を含めたマネジメント体制の強化等々について規定されています。

またアウトカム指標をできるだけ設定して、アウトプットではなく、研究開発の直接的な特許とか論文といったようなアウトプット指標だけではなくて、経済社会的な目標に対するアウトカム指標。できれば定量的なものを設定しなさいというように規定されております。

したがって、このような大きな2点を踏まえて、経済産業省の技術評価指針についても改定をするというのが今回の趣旨であります。

2ページ目をみていただきますと白い2つの箱がありますけれども、現行の評価指針、改定案の項目立てを見ていただきますと、新たにプログラム評価というのを位置づけて、その下にプロジェクトによって構成されるプログラムと、研究資金制度によって構成されるプログラムを位置づけるという形になっています。あわせて私どもの評価指針はこれまで追跡調査をやっているのですけれども、明確に規定されていませんでしたので追跡調査という項目も起こしております。

細かく見ていただく場合は新旧対照表という補足資料—3がございますので、個別にはどの部分がどう変わったというのはこちらで御覧いただけます。大きく分けて今まで個別のプロジェクトとみていたものを、それはそのままプロジェクトの場合もあるし、プログラムとして複数単位でくくってみることができるようにプログラムの評価を入れているというのが大きな変更でございます。あわせて若干文言の修正をしておりますので、この新旧対照表のような形になっております。

また昨年3月に、こちらの前身の評価小委員会のご議論いただきましたときに、当時の小委員会委員長の平澤先生からは、例えば事業のプログラム化が必要である。それは個別のプロジェクトであっても出口をちゃんとしっかり設定して研究開発だけで終わらない、ちゃんと出口志向でプログラムの性というのですか。研究開発以外の要素も含めて、ちゃんとシナリオを設定することが重要であるというご指摘をいただきました。また鈴木委員からはアウトプット、アウトカムも重要だけれども、インパクトとかインカム、シェアですとか売上高というのももう実際に指標として使われるので、そういうプログラムでもある。そのようなご指摘もいただいております。

簡単ですが、以上です。

○渡部座長

ということでございます。せっかくの機会ですので、何かご質問等ございましたらお願いしたいと思います。

○鈴木委員

これが経済産業省のプログラム評価だということで、別にそれについて特に何も言うことではないですけれども、3枚目の右側の変更後の枠の中で、研究開発プログラムの中の複数の研究開発課題によって構成されるプログラムの下に、注意書きとして規制緩和とか特許・標準化、実証事業、税制等の政策ツールを含むと書いていますよね。これは重要だと思うのですが、例えば規制緩和とか税制というのは経産省的にいうとサプライサイドの研究開発のプログラムではなくて、需要サイドの政策です。どちらかというね。だからそこまで踏み込んでプログラム化するというのが、多分重要だという認識でいいなという気がするのですけどね。その辺はどうですか。

○飯村技術評価室長

プロジェクトだけではなくてそれ以外の、例えば規制緩和で各種施策ツールを含めてプログラムと考えなさいというのは、まず政府の大綱的指針のほうにあるアイデアでございます。実務上はどのようにプログラムを設定するかというのに当たって、ここはもう技術評価の場でもありますし、プロジェクトの技術的側面についてはもちろんご議論、審議いただきますけれども、では税制がいいとか悪いとか、そういうことは直接的には言えないので、多分このプロジェクトを出口に向かって進めるためには、例えば税制を使うのですとか、こういう規制緩和を働きかけることが重要だとかシナリオを提示していただいて、それを評価するということが現実的ではないかと考えています。

○鈴木委員

この前身の小委員会の際の議論で私が申し上げたのはそういう話で、やはり経済産業省としてはデマンド（需要）サイドの政策もいろいろツールをお持ちなのだから、そういうものも組み合わせてプログラムにしたほうが、最終的なアウトカムのうまくいったか、いかなかったか、評価とかもうまくいくのではないかとということで申し上げたつもりだったのですけれども。

○飯村技術評価室長

ことしの事前評価の中でも規制緩和ではなくて、むしろ開発された技術の選定に規制を設定していくようなやり方でマーケットをつくっていくべきだと。エネルギー関係の議論もありましたので、プロジェクト、あるいはプログラムのテーマに応じて研究開発以外に使えるツール、どういうものを想定していますかということの評価していく形にしたいと思っています。

○研究開発課（徳増）

ちょっと補足をさせていただきます。研究開発課ですけれども、私、徳増と申します。最近、研究開発課に来たのですけれども、実は4年前にも研究開発課にいまして、4年前のときは改正案のところを、まさに評価の観点ではなくてプログラム推進の観点から右側

をやっていました。今若干、その後いろいろあって違う形で進めているようなのですけれども、そもそも4年前の時点でもこういう形でプログラム化をして、さらに言えば今おっしゃったような規制緩和、特許・標準化、それから税制も含めてプログラムごとに書けるものは全て書いていく形でやっておりましたので、おっしゃったようなデマンドサイドも意識したような書き方。例えばエネルギーであればエネルギー分野の、いわゆる技術の導入のために税制なんか使えるだろうし、規制緩和ももちろんあるし、標準化ももちろんどうやって進めるかをプログラムの中に書いておりましたので、そういったやつをもう一度、再度構築するのかなと思っております。

○小林委員

私も今ここに書いてあるのは非常によろしいかと思います。もう1つ、別の観点で少しお聞きしたいのは研究開発プログラムをどうするか、ということです。多分経済産業省が一番進んでいると思いますし、こういうものを早く指針にされるのはいいと思うのですが、左は複数の研究開発単位によって構成されるプログラム、右は資金制度等のプログラムで、この文章を読んでも定義が2つあるのですけれども、あえてわざわざ分けた理由。例えば別に右のものも複数の開発課題から将来的になったりするわけですね。それをあえて2つ定義された理由がなぜなのかなと思いました。

○飯村技術評価室長

これはもともと大綱的指針のほうがそういう構造になっていまして、プログラムの類型。多分プログラム自体、具体的にどういうものをプログラムで設定すべきかというのを総合科学技術会議の担当のところで議論したときに、この2類型は少なくともいえるのではないかと。

○小林委員

そうですか。私も実はそのワーキング・グループにいて、制度そのものもプログラムです、という議論は確かにありました。ただ、経済産業省の場合は同じような気もしますが、そうでもないですか。

○飯村技術評価室長

例えば……

○研究開発課（徳増）

プログラムをどの大きさでどう切るかは極めて難しいというか、そこが悩みのところで、例えば通常の研究開発プログラム。いわゆる左側ですね。複数の研究開発課題によって構成されるプログラムの場合も、4年前のときには実は経済産業省全体でプログラムは7個ぐらいに分けていまして、その前は19ぐらいに分けていた時代もありまして、プログラムの大きさをどのくらいで切ってつくっていくのが最もいいかというのは、ちょっと我々も悩みどころかなと思っています。競争的資金についても若干幾つかのグループに分けられると思いますし、グループの中でも分野ごとにあったりするものですから、そういったものを考えたときにどの大きさでプログラムと称して切るとマネジメントをよりしやすく、

いわゆる重なりを含めてきれいに整理されるかを考えてプログラムの大きさを決めることになるのではないかと思います。

○小林委員

わかりました。競争的資金制度等の議論では、たしか制度そのものもプログラムでしようという議論だったような気がするのですね。

○飯村技術評価室長

制度そのものもプログラムの1類型であって。

○小林委員

今までの経済産業省のプログラムというのはほとんど左だったと考えて、よろしいですね。

○研究開発課（徳増）

ええ、左です。

○小林委員

わかりました。

○飯村技術評価室長

むしろ資金制度のほうで今後評価するようになるものについては制度。どちらかという
と今まで現行の制度があって、課題があって、制度自体とか、その制度の使われ方とか、
上位施策に対して何を実現するための制度か。単位とか分野はあると思うのですけれども、
上位の施策との関係を明確にして制度を評価するというのを一応想定しております。

○研究開発課（徳増）

今のを考えていくと、例えば大学の若手研究者向けの助成なんていう。いわゆる競争的
資金のところと、あとは事業化に近いところ。いわゆる補助的なやつと若干性格と目的が
違うので、それは1つ、必要性はあるのかもしれないということで、プログラムとしても
おかしくないのかなと。くくりが幾つかに分かれると思いますのでというような気持ちも
します。あと分野というのが若干あるものですから、それでプログラム化するのも、右側
でもありかなという気がしております。

○小林委員

はい。

○菊池委員

ちょっと違った観点でこの評価ワーキンググループというか、評価ということをこれま
でずっとやってきて、私自身が何で10年もたってシステマチック（体系的）にならないの
だろうなと思っていることが2つあるのです。

1つは、先ほども出たように事前評価もやって一応PDCA（Plan—Do—Che
ck—Action、企画・立案—実施—評価—改善）。いわゆるR&D（研究開発）ベ
ースのプログラムで評価していくときのPDCA的な発想の中に評価の体系を具体的に入
れ始めて、そうすると事前と中間と事後というか終了時と、それからしばらくたってから

特定の追跡みたいのがある。そのときに推進課とか主管課とか査定課とか、いろいろなところがあつたときに評価結果のデータベースというのは共有しているのでしょうか。例えば先ほど、実は私はこの10年間のやつは全部手で持って歩いているのです。だから何かのときにはある程度、自分のやつはデータベース化もしてある部分があるのだけど、クリックすると大体すぐ出てくるのです。でもいろいろな課に行つて話を聞くと、推進課は、いや、自分のところのは持っていたかもしれないけれどもとか、または、いや、課長補佐がすぐ替わってしまったのでとか、ほかのところのセクションは知らんよというような話がある。

そうするとプログラムというベース、またプロジェクトベース。プログラムベースを重要視しようとする、それぞれの推進課も主管課も評価課も含めて共通のデータベースをお持ちになってクリックするとか、または新任が来たときは見ておけとか、そのぐらいのことをする必要があるだろうし、それから実際に今度プロジェクトをやっている人たちは、事前評価のものは公開されていることになっているけれども、改めてもとに戻つて自分のプロジェクトはどういうプログラムに位置づけられているとか、どういう制度資金に位置づけられているなんていうのは余り知らずにやっているわけでしょうから、だとすれば実施しているプロジェクトリーダーぐらいには見ておいてくださいとか、そのぐらいのことをしてもそれほど労力でもないだろうしと思うのですよね。そういうことをしないと、せっかく先生方が一生懸命評価して、それからいろいろなワーキングをお願いしてやった方々の労力はどうなってしまうだろうなというのが、実は非常に不思議なのですよね。追跡評価なんていうのは典型例で、ほとんどのやつ、私の弁当箱みたいなところに入っているのがあると思うのですけれども、多分経済産業省の中のどこかにあるのでしょうか。

実はNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）も、小林委員も鈴木委員も入つて、それから渡部座長も入つて見ている。NEDOのほうもデータベース化して、必要になればNEDOでやったことをコピーすれば見ることはできるわけでしょうし、となつてくると他省庁。さっきは厚生労働省だったけれども、厚労省だってやっているわけ。だからそういうものでちょっと複数のキーワードで検索するとすつとつり上がってくるとか、また同じ人がやっているとか、実は特定の先生がもう何十年もやっているなんてケースだってありますので、少しデータベース化をしてほしいな、またシステムチックにしてほしいなという感じはします。

○飯村技術評価室長

ご指摘ありがとうございます。特にデータベース化しているか、それが共有されているかという2つの論点があると思いますけれども、まず公表されているものについてはホームページに載っていますので見られる。それはもちろんです。それから内部でデータベース化はしています。特に当室内では昔のものをよく参照することがありますのでしていますけれども、完全ではない部分がありますので、それは順次アップデートしていくという形で考えています。

共有されているか。これが大事だと思いますけれども、公表されているだけではなかなか共有されない。それから内部のものは検索できる形になっているのですけれども、例えば今日来た原課の人がほかのプロジェクトを検索できるかという、もう前の評価小委員会の第何回の何とかと探していかなければいけないので、そういう意味では共有化と検索して見やすくできるかということも課題だと思っています。それは順次取り組んでいきたいと思っています。

それから評価報告書自体を共有するというのもありますし、省内でも研究開発プロジェクトの一般例としてこんな注意点がある。事前によく調べておかないと、技術的に調べておかなければいけないし、市場も調べておかないといけない。そのために先導研究も必要だとか、特許戦略がないとだめだとか、そういう幾つか学ぶべき共通の点というのがありますので、それはデータベースではないですけれども、私どもからフィードバックするように管理資料業務という形でしております。

○渡部座長

ほかいかがでしょう。

○鈴木委員

プログラムディレクターというのは、どういう形で設定されるのですか。

○飯村技術評価室長

プログラムディレクターは評価のために設定するわけではないので、そのプロジェクトに応じてプロジェクトリーダーであったり、プログラムディレクター、マネジャー。制度でも違いますし、それぞれ形が違う。設定のプロセスも期待されるものも違うと思いますので、むしろ評価の側面としては、そこも含めてマネジメントがちゃんとできているかということを評価項目として、評価するように考えています。

○鈴木委員

例えば経済産業省の中でも去年だか、おととしだか、自動車の燃費を改善するためにいろいろな軽量材料を使うというので、複数の原課がかかわるようなワーキングを一緒にやったことがありますよね。ああいうのもプログラムディレクターというか、経産省の中で非鉄金属課か化学物質管理課か、どこがディレクター的なことをやるのか。そういう体制をつくる必要があると思うのですけれども。

○研究開発課（徳増）

本来でいうと研究開発課の、いわゆる分野ごとの担当者ということで、その人々がプログラムディレクターに近いはずなのですが、実はそこまで専門性が高くないものですから、そこは若干あるのですけれども、恐らくこういう形でプログラムディレクター化をもっと進めていくという、外部人材の活用を含めていろいろ考えなければいけないかなと思います。他方で、今現状でいうと、本来の機能としては研究開発課の中にある分野ごとの担当者というのは、ある種プログラムディレクター的な仕事を本来だと期待されているというように我々は理解しています。

○渡部座長

プログラムをこの観点で設定するような作業は、もう研究開発課の中でやるのですか。

○研究開発課（徳増）

いわゆる分野の中の調整的なものは基本的には研究開発課の中でやることになっているので、いってみれば、それはある意味ではプログラムディレクター的な機能を本来であれば期待をされている。ただ、専門知識も含めて必ずしもプログラムディレクターを適切にできるかどうかというのは、若干まだいろいろ検討の余地があると思うので、本当の意味でプログラムディレクターみたいな、米国でいっているような専門性をもった形で考えると外部人材の活用を含めて、そういったものが必要かどうかを考えなければいけないのかもしれないと思います。現状でいくと経済産業省の中では、そういった機能は研究開発課の中に本来持たせていただく形にはなっています。

○鈴木委員

だから今日の話なんかでも本来やはりプログラム化して、それを説明されるのは担当の課の方ではなくて、プログラムディレクターがやられるのが一番いいのではないかと。多分諸外国でもプログラム評価のときはそういう形でやっているのではないかと思うのですが、そこまではまだできないということですね。

○飯村技術評価室長

そういう形で設定できるプログラムがあれば、もちろん説明者がそうな形になります。

○渡部座長

モデル的にでもそういうのを、何かやりとりの中で結構見ていると、そこに限界があることが多いですね。ぜひ何かいいのを。——いかがでしょうか。

○森委員

このプログラムというのはかなり戦略的に上のほうから——上のほうというとな変ですけども、国として決めていきたい、イメージとしては、そういう感じでよろしいですか。何らかの戦略課題みたいなものを、さらに上位のほうで決めておくというような。

○飯村技術評価室長

多分概念的には上に戦略があって、それに応じて設定される分野ですとか道筋です。まさにプログラムのなプロジェクトの流れ、時系列の流れというような戦略があって、その下にプロジェクトがぶら下がる。実際に配置されるというのが本来一番望ましい姿。この評価の指針に、まず初めにプログラム化が明記されてしまっているものですから、戦略的なものは恐らくそれが理想型ではあるのですけれども、現実問題としては、例えばプロジェクトを幾つか束ねて、プログラムとして評価していくというのが現実的なアプローチになるのではないかと思います。

実際そうなるかわかりませんが、例えば今日の化学物質の安全性評価みたいなものも2つの案件をまとめて、例えばプログラムと呼んでお互いの関係ですとか、ガイドラインに向かう道筋をさらに明確にしていくというものが1つのプロジェクトから、下から

つくっていく。ボトムアップのプログラムのつくり方というのが現実的に1つあると思います。

○渡部座長

逆に言うとか評価の段階になって、これとこれはプログラムだみたいなケースがあるということですか。

○飯村技術評価室長

あり得ると思うのです。でもそれは本当は評価のためではないので、プログラムとしてあるものをプログラムとして評価するのが本来の話。

○渡部座長

本来はそうですね。

○飯村技術評価室長

過渡的には、まず段階的に。

○研究開発課（徳増）

本来はあった課題に対して塊をつくって、塊の中から足りないところをプロジェクトで起こしていくという形になるので、プログラムをどう束ねるかというのを割と戦略的に考えなければいけなくて、昔だと分野ごとぐらいにしていたのかもしれませんが、アカデミア、専門領域ごとに、今だとむしろもうちょっと課題ごとにまとめるという形になるのかもしれませんが、プログラムの大きさのつくり方なり、つくり込みの仕方というのがかなり戦略的になるのかなと思います。

○渡部座長

でも申請時のときと、それから中間評価のときとプログラムが同じでないといけないですよ。それが変わってしまったら、もうわけがわからなくなってしまう。

○飯村技術評価室長

そうですね。あるいは、変わるのだったら説明が必要になります。

○小林委員

プログラムの議論は今でもなかなか難しく、経済産業省は割とやりやすいほうだろうと思うのです。全体の技術政策なりの中で、どうプログラムを作って、個別にどうプロジェクトを行っていくか、について割と整合的にできるのです。一方で、例えば文部科学省のように、かなりベーシックな研究で、どうやってプログラムにするのかというのは多分悩んでおられるのだと思いますけれども、私は国としてやはり税金を使う以上は、研究目的があって、それを幾つかのプログラムで実施して、またそれぞれ個別のプロジェクトを実施して、ということはある得ると思うのです。評価のほうが先行してしまう部分はあるのですけれども、基本的にはそれが評価に舞い戻ってプログラム自体の評価を行うということになり、場合によっては政策までフィードバックされることになります。それでPDCAを回していくという形になれば、理想型だろうと思います。

当面は、まずプロジェクトを束ねたプログラムというものの評価をやらざるを得ないと

思いますので、過渡的かどうかはわかりませんが、こういうステップというのは非常に重要だろうと思っています。

○渡部座長

大体よろしいですか。

○鈴木委員

余り私ばかりお伺いするのも変ですけども、ある意味こういうちゃんとくし形に分かれた、このプロジェクトはこのプログラムという話だけではなくて、マトリックス型も、このプロジェクトはあっちにも、こっちにも残しているというのもあり得ると考えてよろしいですか。

○飯村技術評価室長

現実的にはあり得ると思います。例えば材料と用途みたいな組合せもあり得ると思います。

○研究開発課（徳増）

実際４年目までやっていたのは、少なくともそうですね。複数にわたるやつが相当程度、例えばナノみたいなやつになってしまうとどうしても予防したテクノロジーがありますから、ナノといったやつと、それがＩＴに入ってしまったたり、バイオに入ってしまったたりという重なりぐあいはどうしてもありました。

○鈴木委員

このプログラムのほうでは、このプロジェクトは余り貢献できなかったけれども、こちらのプログラムにはすごく貢献していたというような、そういう評価が分かれる可能性もあるということですか。

○研究開発課（徳増）

あるとは思いますが。

○小林委員

今回、アウトプットとアウトカムに関してそれほど議論はまだ進んでいない印象なのですが、例えば今日標準化の話があって、アウトプットとしては具体的に技術的なin vitro（細胞培養により有害性を評価する試験方法）、in vivo（動物試験により有害性を評価する試験方法）、というような技術ができていくと、最終的にはOECD（経済協力開発機構）のガイドラインになると思います。それはアウトカムですね。

○飯村技術評価室長

はい。

○小林委員

そうすると、そのアウトカムにつながる道筋ができているかどうかというのが重要で、評価検討会委員が道筋ができていないではないかと言われるのは、多分先ほどの形で何がアウトカムか、何がアウトプットか、を整理していかれたらいいのではないかと思います。

○飯村技術評価室長

ありがとうございます。指針は余りアウトプット、アウトカムについては記載していませんで、むしろこの下に標準的評価項目というのがぶら下がるのですけれども、具体的には今日前半の中間評価にもありましたが、こういう観点で評価してくださいという項目がありますので、そこにこのプロジェクトの、あるいはプログラムのアウトカムは何で、そこまでの道筋はどうですかというのをちゃんと書いてもらって、それを評価していく。指針より下のレベルでより具体的に評価するように考えています。

○渡部座長

では、どうぞ。

○津川委員

ちょっと把握し切っていないで申し訳ないですけれども、プログラムというのとプロジェクトというので、例えば今日最初に配られたものは一まとめにして、これがプログラムという位置づけになるのですか。

○飯村技術評価室長

例えば1つずつのカラーの矢印がプロジェクトで、全体をくくってプログラムの時系列で役割の異なるものを配置する。それによって全体として、例えば有害性の評価手法を確立するとか、そういう大きな政策目標のために個別のプロジェクトを配置してみていくという形。

○津川委員

全体の大きな目的というのがあって、それに対応するものは幾つか考えられて、それに対してそれぞれがプロジェクトという形になっている。プログラムを構成するそれぞれのプロジェクトが十分であるかというのは、どの時点で評価されるのですか。

○飯村技術評価室長

それはプログラムを設定した時点で、あるいは評価する段階で、例えば今日も議論がありましたけれども、ナノの中で金属はやっているけれどもCNT（カーボンナノチューブ）をどうするか、カーボンナノをどうするか。いや、別のプロジェクトでやりますということであれば、多分さっきの絵の中にもう一個違う階層の矢印が入るのだと思いますけれども、全体像を整理して役割を評価する。プログラムを設定した時点で空気がないか、ダブるところがないかというのをみていく形になると思います。

○津川委員

プロジェクトごとの縄張りではないですけれども、間に落ちちゃったものはちゃんと拾えるようなことを考えておられるのでしょうか。

○飯村技術評価室長

そういうご指摘をいただいて、何か新しいテーマが出てくることもあるのではないかと思います。

○渡部座長

大体予定の時間になりましたけれども、よろしいでしょうか。——もしよろしければ、本日のワーキンググループはこれで終了ということにさせていただきたいと思います。大変ありがとうございました。では最後、事務局から連絡事項等をお願いします。

○飯村技術評価室長

本日も委員の皆様から大変貴重なご意見を賜りまして、誠にありがとうございました。次回の審議なのですけれども、2月14日、金曜日の午後1時から4時までを予定しておりますので、既にご予定いただいている委員の皆様にはどうぞよろしくお願いいたします。

○渡部座長

それでは、本日はこれで散会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

——了——